

主 題：偽預言者たちに惑わされるな⑥ 彼らをさばかれる主
聖書箇所：ユダの手紙 14節

「ユダの手紙」を学んでいます。教会の中に入り込んで来た偽教師たちの危険性について、ユダは繰り返して愛する兄弟姉妹たちを警告し続けます。前回、私たちが見たのは、五つの自然現象を用いて、彼らがどうしてそこまで危険なのかを教えたところです。もちろん、彼らに対する神の警告は「必ずさばきがある」ということです。でも、教会にとって一番大きなことは、そのような人々の間違った教えが教会に広がってしまって教会に大きなダメージをもたらすことです。また、大きなダメージを各信者にもたらすことです。なぜ、それが問題なのか？間違った教えに惑わされることがそこまで重大なのか？というのは、間違った教えに影響を受けて真理の道から離れてしまうことによって、あなた自身が神の祝福を失ってしまうからです。あなた自身の証を失うからです。そして、あなた自身がほうびを失ってしまうからです。パウロはコロサイ2：18で「あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによつていたずらに誇り、」と言っています。

そして、みことばに従うことによって、神はあなたを祝してあなたを用いてあなたを通して栄光を現してくださる、そのようにして私たちは地上の信仰者としての歩みを走り切っていくのです。でも、偽りの教師たちはそのことを望みません。そして、間違った教えによってひとり一人のクリスチャンたちが真理から離れて行くようにと働いていくのです。私たちはしっかり神の真理に立ち続けて行くように、継続して神の栄光を現し続けて行くために、私たちはこのユダが与えた警告に耳を傾けていかなければなりません。大切なことを警告しているからです。

今日は「ユダの手紙」14節を見ていきます。14節にはこのように記されています。「アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。」、

A. エノク

1. 系図

エノクという一人の信仰者の名が書かれています。いったい、どういう人物だったのか？ここには「アダムから七代目のエノクも、」と系図に触れています。創世記5章にアダムの系図が記されています。5：1-24、また、これは歴代誌第一1：1-3にも書かれています。創世記5：1に「これはアダムの歴史の記録である。…」、3節には「アダムは、百三十年生きて、彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ。彼はその子をセツと名づけた。」とあります。6節「セツは百五年生きて、エノシュを生んだ。」9節「エノシュは九十年生きて、ケナンを生んだ。」12節「ケナンは七十年生きて、マハラルエルを生んだ。」15節「マハラルエルは六十五年生きて、エレデを生んだ。」18節「エレデは百六十二年生きて、エノクを生んだ。」とここに「エノク」が出て来ました。エノクのことが記されている聖書の箇所は大変少ないです。この創世記5章とヘブル11章、そして、今見ている「ユダの手紙」とこの三箇所だけです。

今見たのは、アダムーセツーエノシューケナンーマハラルエルーエレデ、そして、7代目のエノクです。エノクの後にはメトシェラーレメクーそして、ノアです。この系図を見て、カインがいなく思われるでしょう。すべての子どもたちが記されているわけではありません。今見た系図は神が大いに祝した系図です。確かに、カインの系図もあります。創世記4章17節から記されています。「17 カインはその妻を知った。彼女はみごもり、エノクを産んだ。」と、この「エノク」は今見ている「エノク」とは全く別人です。「18 エノクにはイラデが生まれた。イラデにはメフヤエルが生まれ、メフヤエルにはメトシャエルが生まれ、メトシャエルにはレメクが生まれた。19 レメクはふたりの妻をめとった。ひとりの名はアダ、他のひとりの名はツィラであった。20 アダはヤバルを産んだ。…22 ツィラもまた、トバル・カインを産んだ。」とあります。

彼らはどのような人物だったのか？そのヒントが4：24に書かれています。「カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍。」と。つまり、このカインの家系は神に従ったものではなかったのです。カインよりさらに酷いレメクには77倍の復讐とあります。確かに、アダムの家系を見たときに、当然、カインがいたのですが、悲しいことに、彼の家系は神に逆らった者たちでした。5章で見た家系は「セツの家系」で神に従った者たちです。

2. 信仰

このエノクはどのような人物だったのか？5：18、21-24の短い箇所にそのことが記されています。18節「エレデは百六十二年生きて、エノクを生んだ。」21-24節「21 エノクは六十五年生きて、メトシェラを生んだ。22 エノクはメトシェラを生んで後、三百年、神とともに歩んだ。そして、息子、娘たちを生んだ。23 エノクの一生は三百六十五年であった。24 エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼

はいなくなった。」、ここから私たちはエノクがどのような人だったのかを知ります。「エノクはメトシェラを生んで後、三百年、神とともに歩んだ。」とあります。この「歩む」ということばのヘブル語の意味は「交わり、従順の聖書的表現」です。比喩的には「生きる」です。ですから、エノクは神に対して従順であってそのように生きたのです。しかも、この動詞を見ると、エノクは強制されたのではなく自ら進んで神が喜ばれる生き方を選択し続けたということを教えてくれます。「エノクは…神とともに歩んだ。」です。

神がお喜びになること、それは私たちが神の命令に服従することです。神への従順、服従は神の命令であり、被造物の責任です。その歩みを神は喜ばれます。レビ記26：3、12にこのように書かれています。「3 もし、あなたがたがわたしのおきてに従って歩み、わたしの命令を守り、それらを行うなら、条件が書かれています。もし、あなたがたが教えることに、わたしの命令することに従順に従っていくなら、12 わたしはあなたがたの間を歩もう。わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。」と、神はその者にすばらしい祝福をくださるのです。

神はもうすでに私たちすべてにすばらしい祝福を与えてくださっています。一般的な恩恵があります。太陽を与え雨を降らせ…。でも、神は特別な祝福を与えてくれます。それは主イエス・キリストを信じた者に与えられます。信仰者の皆さん、私たちは何があってもどんなときでも喜びをもって感謝をもって平安をもって、主を賛美しながら歩むことができます。私たちの人生を通して、私たちの神がどんなにすばらしいお方であるかを証しながら生きることができます。この全地を造られた神によって私たちは用いられて、その方の栄光のために生きることができます。こんな祝福ある人生を生きるために必要なことは、神のみこころに従って生きることです。それ以外の道はありません。あなたがどのような選択をするのか？それはあなたの大きな責任です。自分の考えに従って生きるのか？神のみことばに従って生きるのか？私たちはどちらかの選択をしています。神が教えてくださるのは、神のことばに従うことです。

預言者サムエルはサウル王にこのように言いました。Iサムエル15：22「するとサムエルは言った。「主は【主】の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」、どんな奉仕をするか？どれだけ熱心に集会に参加するか？それよりも神が喜ばれるのは神のみことばに従うことです。私たちがこの地上を歩んでいる、その人生の目的はこのような祝福を私たちにくださった神への感謝を現わすためだと言えます。神の恵みを覚えるほどに、なぜ、このような祝福を私のような者にくださったのか？そのことが分かるなら、私たちは神に感謝しながら歩んでいこうとします。それはだれかから強制されたからではなく、神の恵みが分かったひとり一人がそのような選択をするのです。神が喜ばれること、こうしなさい、このように生きなさい、これがわたしがあなたに求めていることだと、その命令を聞いたときに私たちは喜んでそれに従っていくのです。

神のことばに従うこと、それが私たちにとってのすべてです。それが神が私たちに教えてくださっていることです。ですから、パウロはこのように言っています。ピリピ2：12「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。」と。これは罪からの救いのことではありません。罪から救われた者がクリスチャンとしてどのように生きていくかという信仰生活のことです。救われた者たちの信仰者としての歩み、それは常に神に対して従順であれということです。パウロがいるときだけでなく、いない今はなおさら従順であれと。また、コロサイ3：6で「このようなことのために、神の怒りが下るのです。」と、神の怒りはだれに下るのか？不従順の子らの上に下るのです。

お分かりですね。神が私たちに望んでおられることは「わたしのことばに従いなさい」です。そして、恵みをいただいたことが分かっている信仰者ひとり一人は、それが神が望んでおられ神がお喜びになることだと知っているから従っていこうとします。そうして、私たちの感謝を現わしていこうとします。

3. 生涯

エノクという人物は神に喜ばれる信仰者でした。罪が横行した世にあって彼は神の前を正しく歩み続けました。神はいったい何を喜ばれるのかと神に喜ばれることをしっかり見極めてそれを選択して従い続けたのです。だから、彼は「神とともに歩んだ」のです。エノクの生涯は、創世記5：23、24「：23 エノクの一生は三百六十五年であった。：24 エノクは神とともに歩んだ。神彼を取られたので、彼ははいなくなった。」と記されています。つまり、エノクは死を経験することなく天に凱旋して行ったのです。このように凱旋した人物は他にもいます。エリヤです。II列王記2：1に「【主】がエリヤをたつまきに乘せて天に上げられるとき、エリヤはエリシャを連れてギルガルから出て行った。」と書かれています。非常に特別な例です。

エリヤもそうですが、このエノクは神の前に喜ばれていたということを見て来ました。新約聖書にもヘブル11：5に「信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。」と書かれています。このよ

うな信仰者でした。神に喜ばれる信仰者だったのです。

皆さん、このような信仰者のことを聞くと、全く自分とは無関係だと思っはなりません。エノクも私たちと同じ罪人でしたが、神の恵みによって救いに与ったのです。そして、彼は自らの選択をもって神が喜ばれることを選んでそのように生きたのです。少なくとも、私たちは今からそのように生きていくことができるはずで。私たちがしっかり覚えておくことは、その生き方を神は望んでおられるということ、その生き方だけが神に喜ばれる生き方だということです。エノクはすばらしい模範です。このようにして彼は神の栄光を現したのです。

4. 働き

ユダ14節に「…彼らについて預言してこう言っています。」とあります。彼の働きは神のメッセージを預言するのです。来るべき神のさばきについて預言したことが書かれています。

5. エノクの預言

14節「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。」と、そして、15節へと続きますが、この「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。」というエノクの預言は旧約聖書の中に書かれているのでしょうか？書かれていません。では、このメッセージをユダはどこから得たのでしょうか？ユダは「エノク書」という外典から引用しているのです。「エノク書」は私たちが手にしている66巻の正典には含まれていません。神の靈感を受けて書かれたものではないとして、それは含まなかったのです。でも、これは敬虔なユダヤ人の間ではよく知られていたのです。だから、ユダは人々によく知られている書物からこのメッセージを引用したのです。もちろん、これは聖霊なる神がそのように働かれたからです。

このメッセージを見たときに、この後見ていきますが、エノクが預言したことは聖書が教えていることと全く矛盾していないということです。神はユダを通して、エノク書から真理をここに引用して人々に警告を与えるのです。エノクは主がこの地上に帰って来られることを預言しました。「主は千万の聖徒を引き連れて来られる。」と書かれています。このことを私たちは「再臨」と呼びます。そのことを聖書は私たちに教えてくれています。ヘブル書の著者はこのように教えています。9：28「キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、これは主イエス・キリストの一度目の来臨のこと、そして、「二度目は、」とあって、イエスが来られるのは二回あると言っています。一度目、つまり、初臨とも呼ぶ「主イエスが人としてこの世に来られ、十字架に架かれた」こと、これが初臨です。続いて、「二度目は、」と「再臨」のことです。「罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。」と、再臨はこの目的のためだと著者は私たちに教えてくれます。

主イエス・キリストは十字架で私たちの身代わりとなって死んでくださり、三日後にその死からよみがえってくださった。その後、イエスはご自分が肉体をもってよみがえったことを40日間地上にいて人々の前に明らかにされました。人々と接することによって、話をすることによって、いっしょに食事をすることによって、ときには、ご自分のからだに触れさせることによって、確かに、よみがえったことを明らかにされたのです。そして、40日後、イエスはオリーブ山から天に凱旋していかれました。使徒の働き1章にそのことが書かれています。1：11に人々がイエスが天に凱旋していくのを見ていと御使いがこのように言います。「そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」とあります。イエスがまた帰って来られることを天使たちは告げたのです。

ですから、確かに、聖書には「再臨」について書かれています。

B. 主の再臨

1. 二つの再臨 : 主イエスの再臨(来臨)は二つある。

私たちは再臨について二つの再臨があることを知っています。「聖徒のための再臨」と「聖徒を伴った再臨、聖徒とともに帰って来る再臨」で、それを私たちは「空中再臨」と「地上再臨」と呼んでいます。先に見たヘブル9：28に「二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。」とありますが、ここに書かれているのはクリスチャンたちを救うために来てくださること、空中再臨のことです。使徒1：11には「あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」とあり、オリーブ山から上って行かれまたオリーブ山に帰って来られる、この地上に帰って来られること、地上再臨のことです。

1) 空中再臨 : 聖徒のための再臨

空中再臨はご存じのようにクリスチャンたちを迎えに来てくださることです。そのときにもう肉体的な死を経験していたクリスチャンたちは新しいからだをいただいて、天に引き上げられます。地上に生き残っているクリスチャンたちは死を経験することなく、栄光のからだに変えられて空中で主とお会いし、神とともに永遠を過ごすのです。

空中再臨のことを聞いてすぐに思い出すみことばは恐らく I テサロニケ 4 章のみことばだろうと思います。11-17 節に記されています。「:11 また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をすることを志し、自分の仕事に身を入れ、自分の手で働きなさい。:12 外の人々に対してもりっぱにふるまうことができ、また乏しいことがないようにするためです。:13 眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。:14 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。:15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

次の箇所はどうですか？イエスがこれから十字架に架かるということを弟子たちに話されたときに、弟子たちの心は騒ぎました。いつもいっしょに過ごしていたイエスがいったいどこに行かれるのだろうか。そこでイエスは「心を騒がしてはなりません。」と言われました。そのメッセージの中で「:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」(ヨハネ 14:2-3) と何のことでしょうか？私たちクリスチャンを主の許に導いてくださる空中再臨のことです。

皆さん、私たちはそのときを待っているのです。いつイエスが戻って来られて私たちをご自分の許に招いてくださるのか？こうしてみことばは確かにクリスチャンたちを神の許に引き上げてくださり、神とともに永遠を過ごすことを記しています。そして、それが私たち信仰者の希望であることはもう十分に皆さんご存じのことです。

2) 地上再臨 : 聖徒を伴っての再臨

もう一つは「地上再臨」です。空中再臨の7年後にこの地上再臨が起こります。そのときにイエスは地上に戻って来られるのですが、ご自分一人で戻って来られるのではないということです。聖徒たちを伴って帰って来られます。今日のテキスト、ユダ 1:14 がそのことを教えています。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。」と。この箇所を見て、この再臨が教えているのは空中再臨ではなく地上再臨であることが分かります。なぜなら、空中再臨はその後クリスチャンへの祝福がありますが、「千万の聖徒を引き連れて来られ」たときに起こるのは、すべての者へのさばきです。続く15節の初めに「すべての者にさばきを行い、」と書かれている通りです。

ですから、この再臨はそのときにさばきが伴うのです。ですから、地上再臨のことです。覚えておられますか？黙示録を学んだときに、主はこの世をさばくために来られることを見ました。黙示録 19:11-21 「:11 また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。:12 その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があって、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。:13 その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。:14 天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。:15 この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。:16 その着物にも、ももにも、「王の王、主の主」という名が書かれていた。:17 また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ばすすべての鳥に言った。「さあ、神の大宴会に集まり、:18 王の肉、千人隊長の肉、勇者の肉、馬とそれに乗る者の肉、すべての自由人と奴隷、小さい者と大きい者の肉を食べよ。」:19 また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。:20 すると、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕らえられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。:21 残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥が、彼らの肉を飽きるほどに食べた。」

イエスのことが「白い馬に乗った方が来られる」と描写されているのは、イエスはすべてにおいて完全に正しいお方だからです。そのときに何が起こるのか？「この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。」とあります。さばきをもたらすということです。

3) 主の日 : 神のさばきのとき

このように神がさばきをもたらすその日のことを「主の日」と言います。みことばを見ると、この「主の日」ということばは旧約聖書中に19回あります。また、新約聖書にも4回見られます。ヨエル書 1:15 には「ああ、その日よ。【主】の日は近い。全能者からの破壊のように、その日が来る。」とあります。すべてをさばかれると言います。イザヤ書 13:6、9 にも「:6 泣きわめけ。【主】の日は近い。全能者から破壊

が来る。」「9 見よ。【主】の日が来る。残酷な日だ。憤りと燃える怒りをもって、地を荒れすたらせ、罪人たちをそこから根絶やしにする。」とあります。

こうして見ると、確かに、「主の日」に関してその日は悪に対するさばきが神によって為されるときです。ですから、「主の日」を聖書はこのようにことばで表現しています。

・「主の復讐の日」 : イザヤ61:2 「【主】の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、」、63:4 「わたしの心のうちに復讐の日があり、わたしの贖いの年が来たからだ。」、エレミヤ46:10 「その日は、万軍の神、主の日、仇に復讐する復讐の日。剣は食らって飽き、彼らの血に酔う。北の地、ユーフラテス川のほとりでは、万軍の神、主に、いけにえがささげられる。」

・「御怒りの日」 : ローマ2:5 「ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。」

・「万軍の主である神の大いなる日」 : 黙示録16:14 「彼らはしるしを行行悪霊どもの霊である。彼らは全世界の王たちのところに出て行く。万物の支配者である神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。」

ですから、「主の日」は神のさばきが下る日なのです。

(1) 「主の日」の到来 = いつ訪れるのか？

2回起こります。

・患難時代の終わりに訪れる = イエスが聖徒たちを伴ってこの地上に帰って来られたときに、神はそこで最後のさばきをされます。マタイ25章に書かれている「羊を山羊に分ける」というところからです。Ⅱテサロニケ2:2-4 「2 霊によってでも、あるいはことばによってでも、あるいは私たちから出たかのような手紙によってでも、主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないからです。4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。」、黙示録16-18 章にも書かれています。

・千年王国の終わりに訪れる = 悪魔は千年間縛られています、最後に解き放たれ、千年の間に生まれた者たちのうちで神を信じない者たちを連れ出して神に戦いを挑むのです。そして、彼らは敗北を喫しそのときに神のさばきが下ります。Ⅱペテロ3:10-13 「10 しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。11 このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならぬことでしょうか。12 そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。13 しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」、黙示録20:7-21:1 「7 しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、8 地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海べの砂のようである。9 彼らは、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。10 そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。11 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのこの自分の行いに応じてさばかれた。14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。15 いのちの書に名をのしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。21:1 また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。」

(2) その特徴 = この「主の日」に関して、

・このさばきの「時」には、しるし、前兆が伴う

マタイ24:3 「3 イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話してください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」、5-12 「5 わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。6 また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。10 また、そのときは、人々がだぜいつまず

き、互いに裏切り、憎み合います。:11 また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。:12 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。」、29—30「:29 だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。:30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。」、

Ⅱテサロニケ2：3「だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないからです。」

主イエス・キリストがこの地上に帰って来られる前にはまさにこのようなことが起こるのです。でも、この地上再臨よりも7年前に起こる「空中再臨」に関しては、何のしるしも兆候も聖書は教えていません。いつ帰って来られるのか分からないのです。だから、私たちは「今日イエスさまにお会いするかもしれない」ということをしっかり心に据えてこの日を生きていくことです。

そして、その兆候は今私たちの周りに溢れています。だから、信仰者は目を醒ましていなければなりません。地上再臨よりも前に起こる空中再臨の日はより近いのです。

・このさばきの「時」は神以外はだれも知らない

マタイ24：36—38に「:36 ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。:37 人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。:38 洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついたりしていました。」、マタイ25：13「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。」

・このさばきの「時」はすでに定められている

同時に、このことも教えられています。使徒17：31「なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。」

その日が決まっているということは、確実に、一日一日その日に近づいているということです。

こうして、「主の日」について神のさばきについてみことばはこのように私たちに教えてくれます。

2. 地上再臨：聖徒を伴った来臨

この地上再臨についてエノクは語ったのですが、それに関して彼はこのような説明を加えています。

「主は千万の聖徒を引き連れて」と。この「千万」ということばは「数え切れないほど」、「引き連れて」とは「伴って、いっしょに」という意味です。「聖徒を引き連れて、聖徒とともに」再臨されるということです。「聖徒」とはだれを指しているのでしょうか？確かに、聖書は主イエス・キリストの再臨のときに伴われる存在として二つのことを教えています。

1) 天使たち：罪を犯していない聖い天使たちです。主イエス・キリストが帰って来られるときにこの天使たちもイエスとともに再臨するのです。マタイ25：31に「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。」とあります。聖い天使たちを連れて来ると言います。また、Ⅱテサロニケ1：7にも「苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります。」と書かれています。

では、何のために主は御使いたちを従えて来るのでしょうか？Ⅱテサロニケの次の箇所1：8に「そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。」とあります。神のさばきがあるということです。神のほうびをいただくことではありません。神に逆らって来た者たちへの神の審判、神のさばきが下るといことです。

ユダの手紙1：15を見ると「すべての者にさばきを行い、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。」と書かれています。地上再臨はさばきが伴うのです。そして、御使いたちがそのさばきに関わっていることがこのように聖書に教えられています。ですから、ここに書かれている「聖徒」は御使いたちであると言えます。

2) 救われた者たち：もう一つは「聖徒」とは「救われた者たち」、罪の赦しをいただいた者たちと、そのように言えます。Ⅰテサロニケ3：13に「また、あなたがたの心を強め、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき、私たちの父なる神の御前で、聖く、責められるところのない者としてくださいますように。」とあります。同じように、コロサイ3：4にも「私たちのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れます。」とあります。

ですから、確かにみことばには、主イエスが地上に帰って来られるとき、天使たちを従えて帰って来られるし、主イエス・キリストによって罪赦された信仰者たちも同じように主とともに帰って来るとい

ことが書かれています。ですから、どちらなのか？を探るよりも、どちらともに帰って来るというのがみことばが教えていることです。補足しますが、主イエス・キリストとこの地上に帰って来る信仰者たちとはだれのことでしょう？ペンテコステ以降の教会の時代のすべてのクリスチャンたちがこのときいっしょに帰って来ます。あなたはそのときに主イエスとともに地上に帰って来るのです。

では、教会の時代が始める前の人々はどうなのでしょう？彼らも主イエスが帰って来られるときそこに立ちます。そして、もう一つのグループがあります。患難時代を生き延びた者たち、患難時代に殉教した者たち、すべてのクリスチャンたちです。患難時代にも主イエス・キリストを信じる人たちが起こって来るからです。このようにすべてのクリスチャンたち、教会の時代のすべてのクリスチャンたち、それ以前の信仰者たち、そして、患難時代に信仰に至ったすべての者たちが、イエス・キリストが地上に帰って来る時に彼とともにそこに立ちます。そして、その後何が起こるのか？千年王国が始まります。

注目いただきたいのは、ユダ 1 : 14 の「…来られる。」という動詞です。明らかに、ここで描写されているのは未来のことです。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。」と。でも、実際にこの「来られる」という動詞の時制は不定過去です。過去のこととして書かれています。なぜでしょう？このように未来のことなのにもうすでにそれが起こったかのように書かれている場合は、この出来事が必ず起こることを教えるのです。「起こるかもしれない、起こらないかもしれない」ということではないのです。絶対に起こる出来事をこのような書き方をします。ですから、エノクが言うこと、みことばが教えていることは、主イエス・キリストは絶対に確実に帰って来られるということです。さばきのために、そして、私たち救いに与っている者たちは主とともにそこに立つのです。空中で主と会った人たちは神の許に引き上げられます。その人たちは主とともに地上に帰って来るのです。それは疑いのない事実です。これは神ご自身が約束してくださっています。

神に逆らう者たち、神の前に罪を悔い改めないで救いを受け入れない罪人に対してエノクは警告していました。神に逆らっている者たちには必ずさばきがあるという警告です。その当時、エノクがいた時代も大変な罪の中にありました。どの時代をとっても、どの地域をとっても、人間の居るところには必ず問題があるし、神のメッセージを聞いていても多くの者たちはそれに背を向けます。エノクが警告したことは「必ず神のさばきが下る」ということです。それが聖書の警告です。昔も今も変わることがありません。神に逆らい続けている者たちへの神からの警告です。

もしかすると、この警告はあなたに対する警告かもしれません。神は救いの機会を与えてくださっているのにあなたはそれを拒み続けている。私たちは何度もみことばを通して教えられているように、この偽教師たちのように、救われている者として振舞うこともできます。また、そのように振舞っている未信者がいるのです。自分は救われているかのように振舞うのです。だから、警告があります。あなたはうまく騙しているつもりかもしれませんが、神を騙すことはできません。

あなたの救いは大丈夫ですか？今日死んでも確実に神の許に行けますか？あなたの罪は 100%、確実に赦されていますか？感謝なことに、神はまだ救いの御手を差し延べてくださっています。罪を悔い改めて、主イエス・キリストの救いに与ることです。救いをいただいている皆さん、確かに、主イエスは私たちクリスチャンのために帰って来られます。私たちはその日を待っています。問題は、その備えができていますかどうかです。いろいろな人の考えや教えなど、このみことば以外のものに信仰が惑わされてしまって、あなたの人生における優先順位が狂っているかもしれません。主イエス・キリストを信じて神への愛は増し加わっていますか？その愛は冷え切っていませんか？救いに与ったあなたに神が与えてくださった霊的賜物をしっかりと用いて熱心に主に、また、教会に仕えていますか？

最初に見た通り、神がお喜びになるのは神のみことばに従うことです。そして、今言ったように、あなたの賜物を用いて人々の成長のために仕えていくことは、神のみこころです。そのように生きていますか？あなたは信仰者として自分の信仰が成長することを願っていますか？そして、あなたの信仰が成長するために、あなたは最善を尽くしていますか？何となく一日を過ごしていませんか？

エノクはどうだったか？彼は 365 年間、与えられた人生を、特に子ども（メトシェラ）が生まれてからの 300 年間、神とともに歩んだのです。神が喜ばれる生き方をしたのです。そして、私たちにもそのことが可能だと言うのです。神が与えてくださる恵みによって私たちは神が喜ばれる歩みを為すことができるのです。失敗すれば神の前に告白しつつ生きていくのです。でも、少なくとも、私たち信仰者の中には神への感謝があります。それが私たちの動機ではありませんか？あなたは神を一番に愛していますか？兄弟姉妹たちが集まってともにみことばを学びともに祈り合い神を崇めることが、あなたにとって最もすばらしい楽しいことですか？ひとり一人自らの信仰を吟味する、私の歩みは神の前にどうなのか？と。どうぞ、そのことを考えてください。エノクは神に喜ばれることを選択しながらこの地上での務めを全うしました。あなたはいかがですか？